一長板を小板に成事は、堺の生玉三仁と云わび茶人、天王寺の古キ平瓦に風爐を居へ、茶湯に出し、紹鷗に見せ申候所、長板を切ちゞめ候はんと兼て思ひ候とて、長板半分に切、風爐居申され候、其後利休至極の取合と感入、それより小板に成候、平瓦の寸法九寸五分四方在之よしにて利休小板に被致候、今の大板九寸五分四方、是を大板と云、小板八寸五分四方也、板の厚サは五分半六分なり、風爐を居置合するは、たゝみの縁より大板は七目、小板は九目、又は十一目にも置合ル也、板幅一寸違申故に、疊目二目にて一寸違申候、當代も堂伽藍のひら瓦は九寸五分、常の平瓦は八寸五分也、總じて道具の取合同意を嫌ひ申候故、小板大風爐、大板に小風爐を居申候、諸道具取合如此と心得べし、

〔茶譜〕眞ノ臺子を小板ニシテ風爐ヲ置、小棚ヲ釣テ道具ヲ置、水指茶入茶碗ヲ疊ニ直ニ置コト宗易ヨリ初ム、

右小板ト云ヲ仕出シテ風爐ヲ置、小棚ヲ釣テ茶具ヲ置コトハ、臺子ヲ二ツニ割テ略セリ、長棚ハ臺子ノ略、小板ハ長板ヲ二ツニ割心也、小棚ハ臺子ノ天井ヲ割テノ心也、

〔槐記〕享保十三年五月三日、風爐ノ板ハ、大板、小板、中板、丸板、木地、燒杉等アリ、半板ト云モノハ、御流儀ニハナシ、丸板ハ勝手ノモノ也、表向ヘハ出サズ、大中小ハ風爐ノ見合セ、大風爐ヲ小板ニノスルトキハ、必茶巾ハ水指蓋ノ上ニヲク、小風爐ナドノ大中板ニノリタルトキハ、板ノ上ニヲク、置處ハ必ズ水指ト風爐トノ間ニ置ベシ、是臺子ノトキ、茶巾ノセノ常座ナレバナリ、七日、參候、塗板ト木地ノ板トハ差別アリ、金風爐ハ、イツモ木地ノ板ニ置、土風爐ハヌリ板ニヲク、風爐ノ板ニ丸キアリ、アレハ畢竟勝手也、（御前（近衛家熙）ニモ、ヤキ桐ヤキ杉ノ板アリ、金爐ニチカル、木地ノ部丸板ノコトハ、道億ガ説ニハ、圓々角々ノト云コトハアリ、圓角々々ド云コトハナキコトナリ、タドヘバ丸キ釜ヲ四角ノ風爐ニカケテ、又丸キ板ヲスエルハ圓角也、四方釜ヲ丸風爐ニ角板モ圓角ナリ、丸キ釜ニ丸キフロ、角ノ板ハ、圓角ニアラズト申サレタリ、イカガ、）